



## 編物復元—その4—

富山県埋蔵文化財センター

### ヒノキを編む

出土品の本来の形は、編物の構造上、横材をねじりながら渦巻き状に編み進めていける円形をしていたと考えるのが自然です。しかし、このような技法を用いてつくられた編物は現存しません。今回は、石川県金沢市東市瀬遺跡から出土した縄文土器の外底面に残された編物圧痕を参考として、復元案を考えました。

#### ①骨材を組む

長めの条材を3本組み、骨材とします。2本だと少なすぎ、4本だと中心の重なりが厚くなりすぎて不都合なので、ここでは便宜的に3本としました。骨材の中心を横材で軽く縛り固定してから編み始めます。なお、中心は固定しなくても編むことは可能ですが、仕上がった時に骨材が白く見えてしまうため、見栄えの点からは固定したほうが良さそうです。

#### ②編み始め

骨材を組んだ中心を始点として、時計回りにもじり編みを始めます。最初は骨材1本に対して横材2本で上下を挟み、ねじりながら編みます。ねじる方向は、進行方向に向かって右回りとなっていて、右利きの人にとって作業しやすい方向です。

#### ③縦材を追加する

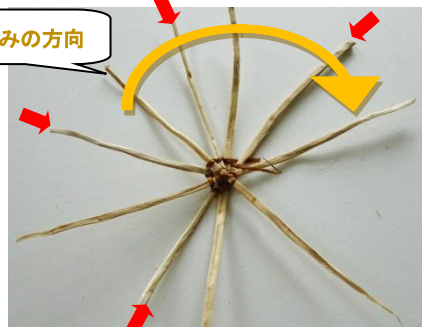
もじり編みを1周したら、骨材の間隔が空いている部分に次々と縦の条材を差し込みます。縦材を増やすことで、目の細かい編物となります。この段階の縦材は、1本を基本とします。

#### ④縦材を分けて増やし、編物を大きくしていく

自然木を素材とする縦材はほとんどが曲がっているため、編み進めるにつれて不規則的に隙間が空いてきます。出土品を観察すると、縦材の足し方に規則性はみられず、隙間にその都度縦材を足している様子がわかります。



① 条材を3本組み合わせ基本の骨材とします。中心を横材で固定します。

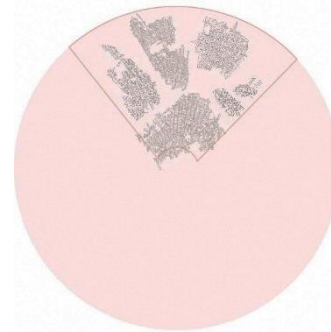


②-1 中心から時計回りにもじり編みを始めます。

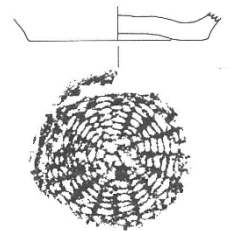
③ 編みながら骨材間に縦の条材を差し込んでいきます。(→部分)



②-2 横材は進行方向に向かって右回りにねじります。編み進む方向も横材をねじる方向も、右利きの人作業しやすい向きです。



小竹貝塚出土編物図  
編物の断片を並べた結果、赤で示した円形の復元形が想定されます。



東市瀬遺跡の縄文土器底部外面に編物の圧痕が残る。編物は繊維質の植物を幅3mmの横条としてもじり編みしたものとされます。中期中葉～後期初頭。金沢市教育委員会1985『金沢市東市瀬遺跡』から転載



隙間が空いてきた部分の縦材に沿わせるように新たな縦材を差し込み、2本1組にします。編み進めながら2本1組の縦材をふたつに分けます。1本ずつ分けた縦材には、編みながらそれぞれに新たな縦材を添えて再度2本1組にしていきます。このような段階を経ることで編み目の細かさを保ったまま、次第に編み物を大きくすることができるのです。

縦材は規則的に分岐させるよりも、木の自然な屈曲に従って不規則的に分岐させた方が美しい仕上がりになります。もじり編みは、ざる編みと違ってねじりが入るため伸縮しやすい構造で、縦材を継ぎ足しやすくなっています。完成した復元品は縦材の部分が立体的に盛り上がり、出土品に雰囲気が近いものに仕上がりました。(朝田亜紀子)



④-1 縦材を増やしながらかみ進めします。中心付近では縦材1本で編むと、目の細かい仕上がりになります。



④-2 縦材を新たに差し込み、2本1組にします。編み進めながら2本の縦材を分岐させて細かい編み目を作りつつ、編物を大きくしていきます。



④-4 縦材の追加と分岐を繰り返しながら渦巻状にもじり編みして、編物を大きくしていきます。縁仕舞の方法は残念ながら不明なので、これで完成です。



④-3 もじり編みの様子。手前(下)方向に締めながら編むと、自然と編み目が詰まってきます。



復元品拡大(部分)



左:小竹貝塚の編物実測図(遺物番号3192)遺物実測図の横材を色分けして縦材が分岐していく様子を示したものの。赤の1本から青の2本へ縦材が分岐しているのがわかります。